
星のカービィ 運命の車輪

翡翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカービィ 運命の車輪

【Zコード】

Z9782Y

【作者名】

翡翠

【あらすじ】

PPPランド史上最大の危機！？このままではPPPランドどころかポップスターも滅んでしまう！その未来の鍵になるのが、宇宙を旅する盗賊団で…！？運命の車輪に導かれ、カービィの戦いが今幕を開ける！

この話は小説力キコというサイトで2011年の3月から5月にかけて連載したカービィ小説です。すでに完結済みです。

序章　運命の車輪（前書き）

実はこの小説が人生初の一次小説だつたりします(*^-^*)
構成は星のカービィ アニメ+星のカービィ 参上!・ドロツチエ団
！です。

序章　運命の車輪

広大の宇宙のどこかに、ポップスターという星があります。その星のまだどこかに、プップランドという国があります。プップランドはとても平和な国、たまにおバカな自称大王の暴君が、騒ぎを持ち込むだけで、大変豊かな国です。

プップランドには、とても大切な秘宝があります。

『運命の車輪』といふ名の秘宝です。

その秘宝は、プップランドの運命を守る強大な力を持つています。車輪があるから、国は栄え。

車輪があるから、富は平和な暮らしをおくれるのです。

『運命の車輪』には、プップランドを愛する人々の思いで力を発動させています。

遠い美しい泉を守る、星の杖のように・・・。

『運命の車輪』は、いわばプップランドの心臓です。車輪がなくては、プップランドは滅んでしまいます。

それほど大切なものです。

巨大な存在。

『運命の車輪』は、プップランドの奥深き谷に存在する生ある遺跡、カブーによって守られています。

カブーは心臓の門番です。

車輪の存在は、カブー以外は誰も知っていないのです。

プップランドが生まれた時からある巨大な存在は、形すら見せず、存在しているのです。

運命を変えうる力。

車輪の力は強く。

最強です。

もし悪の手に渡つてしまつたら。

この世界は一体どうなつてしまつのか・・・・。

だからこそカブーはその存在を誰にも告げませんでした。

プププランド・・・・世界を守るためにも。

だから今の今まで、プププランドは平和を保つてこれたのです。

これからも保ち続けるつもりでした・・・・・。

だからこそ、

誰もこれから起る危機に気づいてはいませんでした・・・・・。

第1章 はじめる桃色（前書き）

カキコのサイトのほうと、改変している場所が多數あります。

第1章 はじまる桃色

「」はフフフランド。

あきれかえるほど平和な国・・・。

「カー-----ベイイイイイ
！」

少女の甲高い声が、フフフ高原の広い大地にサイレンのように響き渡る。

「はははははーい なあに? フーム? (汗)」

カービィと呼ばれた、かわいらしい桃色の丸い球体の生物は、フームと呼んだ亞麻色の髪の少女に、冷や汗を浮かべながら返事をした。

「カービィ・・・あなた、私の作ったクッキー食べたでしょ

フームは大きな瞳を最小限にまで細くし、カービィを睨み付ける。

「あははー・・・ボクがそんなことするわけないでしょー・・・
ボクは机の上にあつたクッキーなんて・・・たたた食べてないもん

」

あきらかに動搖しているカービィに、フームは一つ咳払いをした。

「じゃあカービィ。質問させてもらうわ。どうしてあたしの作った
クッキーが机の上に置いてあつたことを知ってるの？」

「えーえ・・・・・エツヒーノーのー・・・・」

「そして、あなたの口のまわりについているのは、なあに？」

「フレームはカービィの口のまわりにこびりついている、クッキーの力
を指差した。

「あんまりやめておきなさい。」

観念したかのよつて、カービィは緑の生い茂る平原にひれ伏した。

「うめんなさい・・・ボク・・・ボクおなかがすいて・・・つい・

・・本当にめんなさい！」

小刻みに震えているカービィは、自分の真正面にいるフレームに顔向けができなかつた。

גָּדוֹלָה מִבְּנֵי יִשְׂרָאֵל

中を、やれこへなでた。

てしまつた。

「え？ ・・・ フーム？」

「大丈夫よカービィ。もともとあのクッキーはあなたにあげるつもりだつたの」

フレームは、カービィをだつこするように持ち上げた。

「でもね、もしあのクッキーが他の人にあげるクッキーだったら、私はもつとカービィのこと叱るわ」

カービィはしょんぼりとうつむいて、「うん……」と言つた。

「それは私だけじゃなくて、他の人もされたらとっても嫌なことよ。だから覚えておいて。人のものを食べたり使つたりするときは、必ずその人に許可をもらわないとダメよ」

フレームの緑色の瞳が、力強くまっすぐにきらめいた。

「約束して。カービィ。今のこと」

「うん！わかつた！約束する！」

カービィは誓いの約束を結んだ。

「うん、うん！えらいわ！カービィ！」

フレームが嬉しそうに微笑んだと同時に、

「姉ちやーん！カービィーーー！」

「おーい！フレームー！カービィーーー！」

「一人（いや、一人と一匹？）を呼ぶ声が聞こえた。

「あー ブンー トツコワーー」

カービィは「ヒヒヒ笑いながら、ピヨハピヨンとはねた。

「おお？・・・なんだか今日はえらい機嫌だなあ・・・」

不審そうな田つきで、トツコリと呼ばれた鳥は、カービィの頭の上をクルクルと回る。

しかしカービィは、トツコリが自分を不審そうな田で見ている」とにもいつさに気にせず、飛び回るトツコリを見て楽しそうに笑っている。

「で？姉ちゃんとカービィは何してたの？」

「まあいろいろとー」

「ームの答えにブンは「ふーん、変なの」と不思議そつて頭をかしげた。

「じゃあ今日もサッカーやるうぜー他のみんなももうじきくるしー。」

「げーまたサッカーかよー！」

「ええ？またあ？」

「なんだよ、姉ちゃんもトツコリも、ノリ悪いなあ」

「じゃあお前おいらくら」小さくなつてみろよ！ボールにつぶされんだぞ！それも毎回！」

「だつてサッカーフて疲れるじやない・・・それに前にカワサキの店の窓ガラス割つて、さんざんにあつたじやない・・・」

「でも最終的にアドレーヌの魔法で直したじゃん」

「それとこれは別だい！」

二人と一匹の言い争いの中、カービィは「あつ」と小さく言つた。

「「「どうした？」」

その言い争いはあつけなく終了を迎えた。

「ポール家においてきちゃつた！とつてくるー」

カービィは、急いで家に向かつて走つた。

「こつてらつしゃーー」

frmの間延びした声に手を振つて、カービィは高原の丘の向こうに走り去つていった。

「・・・なんかカービィも大人になつたよな

「確かにお前よりはな

「なんだつて――――！？」

「 もうー！ ブンもトッ ハツもやめなセーー。」

トッ ハツ ハツかみかかったブンをフームは引せねがす。

「 トッ ハツだつて全然子供じやないかーー。」

「 ふんーおいらをなめてもいいからや困るねー。」

「 もうね」

その時

「 やつほーい みんなー！」

「 ジニヒサガ、 みなわー」

ベレー帽をかぶつた髪の短い少女と、赤いリボンをつけた要請の女の子が現れた。

「 おっすーー アドレー ヌー リボンー！」

「 おー 人さん、 悲しごお知らせだい。 今日もサツカーだ・・・・・

トッ ハツ の嘆きに一人は「またー？」と叫んだ。

「 いいじやんー 今のマイブームだぜー サツカーはー。」

「 そのマーブームを他の奴に押し付けるのも、どうかと想ひます。・・・

「

「あれ？ カー君は？」

「アーリーたんでしうか・・・」

アドレーヌとリボンがキヨロキヨロとあたりを見回す。

「ああ、カービィは今……」

続話を語り口として、言えなかつた。

なぜなら。

というカービイの巨大な声でかき消されたからだ。

「こらー！カービイ！近所迷惑でしょ！」

卷之三

エジマラセ黙ヒヒヒ

「...すみませんが、お手数ですが...」

「まだガラス割らないでねー・・・描くの面倒だから」

「行きましょう！カービィさん！」

「うん！」

ボーン！と広大な大地に白黒のボールが飛び上がる。

それを追いかける子供たち。

楽しそうに、無邪気に。

笑つて笑つて、はしゃいではしゃいで、ふざけてふざけて。

嫌な気持ちを投げ出すように。

走つて走つて。

大切な時間。

そう、忘れてしまつくらいに平和で大切なこと。

第2章 白色の夢（前書き）

ツンデレマルクかわーこみジンマル) ^o^ (設定は銀河に願いをの後つてことで許してください・・・ (汗)

あれ? リサはどこへ?

君の夢だよ。ただひとつここもと違ひナビね。

違うって？・・・ていうがボク・・・夢の中にいるの？

そうだよ。君は今眠つていて、夢を見ているんだ。

そうなんだ。ボク、夢の中でこれは夢ってわかったの初めて。

そういうことを覚醒夢っていうよね。

君の夢だもの

ボケの色？夢には色があるの？

うん。夢は心の内側の鏡だもの。

鏡

そう。
鏡。

ねえ。

なに？

君は誰？さつきから声しか聞こえないんだけど……。

ふふふ……じゃあ、今君が一番会いたい人を呼んで。

一番会いたい人……？

さあ、誰？

マルク。マルクに会いたい。

どうして？

わからない。でも、ボクはマルクに会いたい。

どうして？君が本当に会いたいのは、メタナイト卿やデデデ大王、

グリルやドロシア、ホームやブンヤトシコリ、アドレー・ヌやり

ボン

や他の人もしれないよ？

ううん。ボクその人たちならいつでも会えるもの。

マルクとは会えないの？

……。

わかつた。マルクだね。

・・・・・。

・・・・・。

・・・・・。

・・・・・。

・・・・・。

・・・・・。

・・・なんて顔してるのサ。カービィ。

マル・・・・ク。

ひさしひりなのサ。銀河での戦い以来サ。

やつと・・・会えた。

！・・・なんでお前が泣くのサ。

よかつた・・・生きてたんだね・・・。

ぼくがそう簡単に死ぬと思ったのか？まあ死にかけたけど。

・・・あの時、意地でもポップスターに連れてくれば良かった。

ポップスター・・・か。

「ほむる……じゃあマルクも今寝つてるの？」

まあね。ぼくの魔力は戦いでほととぎ失われてしまつたから、
眠つていないとね。

そつか・・・・・。

この夢は・・・誰かの魔法で構築されてゐるのさ。

え・・・・。

よつぜじお前に伝えたことがあるんだね。

誰が・・・・?

・・・ぼくのフルパワーの時の魔力よりも強い・・・」りつや
だものじやないのサ。

魔力つてことは・・・魔法使い?

そうでもないのサ。魔法使いじゃなくたつて魔力を持つて
のは

腐るほどこるのサ。

そつか・・・・・。

ホントお馬鹿さんだねえ。あーあ、せひしてほむるこつなん
かに 負けたんだる。

・・・・・。

まあ、時間がないから、ぼくが伝えるべきことを伝えるのサ。

伝えるべきこと?

「この術者はお前に伝えることがあるみたいなのサ。で、ぼくがその伝言を伝えるべきもの。

だから誰かを呼び出したんだ。

そういうことサ。じゃあ伝える。「もうすぐ」のプロプランDは今　まで史上最大の危機に陥る。その危機からプロプランDを守つてほ　しい」以上。

最大の危機!?

はー・・・ぼくの事件は最大の危機ではなかつたのかー。

マルクー・どうこうこと?

知らないのサ。ぼくが伝えられたことは全部伝えたのサ。

危機がくるならなんかあるじやん!

なんか?

ほー!この危機を止める方法・・・とか・・・。

だからあれだけだつて・・・。

そんな・・・。

・・・・・・・・。

でも・・・最大の危機つてなんだろ？・・・・・。

・・・・・・・・。

マルク？

・・・・・いや、ぼくの行動は失敗だったのかなって・・・。

・・・・・・。

！だから・・・なんでお前が泣くのサ・・・。

ごめんね・・・・・。ごめんねマルク・・・。

はあ？

君のこと・・・助けられなかつた・・・。

それは・・・！お・・・お前には関係ないのサ！

・・・・・・・・。

だつ・・・！ぼ・・・・・ぼくは・・・自分のした行動は間違つて
たつ　て思つてゐるサ・・・・！

え・・・?

だからっ！ぼくは自分のした行動が間違つてたて思つてゐるサ-

・・・・・・・。

こちこち泣くのはやめるのサ-。ぼくは別にむずかしいと感ふ
でも なにし禮でもなー！

・・・・・・・。

もうーお前のやうこつお人よしのとこ大嫌いなのサ！

・・・・・よかつた。

?なんなのサ・・・・

ボク、ずつと怖かった・・・。マルクに恨まれてるんじゃないかと
思つて・・・。

・・・！

よかつた。よかつた・・・。

「ひひひれしきもやめりー！氣持け悪このサ-とこかべー！伝
えるべきことは伝えたのサ-れ・・・そこならー！

待つて！

なんのサーーしつこー！なんのサそのしつこわせー！

大好きだよ・・・・・！マルク・・・・！

・・・！

マルク！ポップスターにいつでも来てね！ボク・・待ってるから！

・・・・・・・。

マルクはボクの大切な友達だよーずっとずっとー！

・・・友達・・・か・・・・・。

うん！

お前の強さは・・・そこか・・・。

？

そうだったのか・・・・・サ。

あー言い忘れた！ポップスターにこれなかつたらボク迎えに行くからー！

・・・・・・・。

行くからね！

・・・・・お・・・・・。

へ？

お前のやうごうとは・・・嫌いじゃない・・・のサ。

エへへ ありがとう。

・・・じゃ あ大好きつていつくらこなんだから、一線を超えない程度の愛の言葉でも考えていてほしいのサ！

一線？

お前の知らないことだよ！バーカ！

そりゃー？

エへへー

ホント気持ち悪いな・・・お前は。

カービィ。

消える前に一撃。

死ぬなよ。

お前はぼくが殺すんだからな。

あとひとつ一撃。

「　　」には氣をつかぬのか。

「つて……？」

「なに？」
「マルク？」
「聞こえないよ……。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9782y/>

星のカービィ 運命の車輪

2011年11月29日16時46分発行